

## 〈 水 稲 〉

今月は、穂になる茎数を確保するための重要な時期です。茎数を確保するための水管理を主体に各作業の留意点を紹介します。

### ○移植栽培の水管理

- ・高品質・良食味米の安定生産には、強勢茎を主体に穂数を確保することが重要です。このため、中苗で田植えを行った場合は、第3節から第6節の1次分げつを確保する必要があります。
- ・活着後は、水温と地温を上昇させる水管理を行います。最高気温が15℃未満の場合には深水管理を行い、15℃以上の場合には浅水管理（3～5 cm）とします。
- ・分げつの発生は、昼夜の水温較差が大きい場合に促進されます。このため、かんがいは水温の低い早朝に行って短時間で終了し、日中は止水管理を行います。
- ・かんがいの水温が低い地帯では、温水田やう回水路、ポリチューブなどを用いて水温の上昇に努めます。また、畦畔や水尻等からの漏水防止対策を徹底し止水管理を確実にを行います。

### ○直播栽培の水管理

- ・カルパーコーティング種子の直播栽培で、播種後の落水管理終了後は、出芽がそろうまで浅水管理（3～5 cm）を行います。出芽がそろった後は、気温と生育に合わせて水深を調節します。

### ○余り苗の処分

- ・連続した欠株が3株未満の場合、欠株による収量への影響はほとんどありません。田んぼに放置してある余り苗は、いもち病の伝染源になりますので、速やかに土中へ埋めて処分します。

### ○葉いもち予防

- ・葉いもち防除として側条施用剤や箱施用剤を使用しなかった場合は、6月15日頃（6月12～18日）にオリゼメート粒剤を10 a 当たり2 kg 施用します。
- ・直播栽培は、移植栽培に比べて葉いもちの初発生が遅れますが、6月23日頃（6月20～25日）にオリゼメート粒剤を10 a 当たり2 kg 施用します。

### ○除草剤の適正使用

- ・除草剤は、ラベルを良く読み使用基準を遵守します。使用する除草剤は、前年の残った草種に合わせて選定し、散布適期を逃さないようにします。
- ・一発処理除草剤は、散布時のほ場の水深を5～7 cmとし、除草剤が拡散・展開しやすくします。また、除草効果を安定させるため、散布後7日間は止水管理を行い、かけ流しや落水は行いません。
- ・一発除草剤を散布した後、残草が目立つ場合は中・後期除草剤を処理します。残草がヒエの場合は、クリンチャー剤やヒエクリーン剤、ヒエクッパ剤等を処理し、ヒエ以外の広葉・多年生雑草の場合は、バサグラン剤等の処理が効果的です。

## ○斑点米カメムシ類の防除対策

- ・本県の主要加害種であるアカスジカスミカメは、ノビエやホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草の穂に産卵するため、これらの雑草が水田内で繁茂すると多発し、斑点米による被害が甚大になります。このため、除草剤の適正使用による水田内の除草を行い、農道・畦畔等の草刈りは出穂する10日～15日前までに数回行います。

## 〈 小 麦 〉

### ○赤かび病防除

- ・赤かび病によるカビ毒が発生しないように防除を徹底します。赤かび病感染の危険が最も高い時期は、開花が始まってから10日程度の間です。感染後の薬剤散布は、治療効果があまり期待できないため、予防を心がけます。
- ・1回目の防除は開花始期に行い、シルバキュアフロアブルかストロビーフロアブルを使用します。
- ・2回目の防除は、1回目から7～10日後に1回目とは別系統の薬剤を散布します。

### ○収穫・乾燥・調製

- ・収穫は、成熟後の子実水分が30%以下になった時に実施します。収穫した子実は、穀温が上がるため、袋に入れる量を7分目程度にします。
- ・収穫後の一時貯留を避けて、できるだけ早めに送風乾燥を行い、乾燥温度は50℃、穀温は35℃前後とします。最終の子実水分は、12.5%に仕上げます。
- ・調製は、ふるい目2.2mmで実施します。調製後の保管は、低温・低湿条件で行い、バクガ等の貯蔵害虫の発生を防ぎます。

## 〈 大 豆 〉

### ○播種

- ・好適な土壤水分条件では、砕土率が高まることから播種作業効率が高まります。また、播種後の出芽と苗立ちが良好となるほか、除草剤の効果も高まるため雑草の発生が抑えられます。
- ・6月中旬までに播種する場合は、畦間を管理作業機に合わせて70～80cm、株間は15～20cmを目安とします。
- ・播種粒数は、10a当たり12,500～19,000粒を目安とし、中粒の「リュウホウ」の場合は、播種量が10a当たり4～6kgとなります。
- ・播種時期が遅くなると生育量の不足による収量低下が心配されるため、播種時期に応じて畦間や株間の調整により播種量を増やします。6月下旬に播く場合は19,000～33,300粒とし、7月上旬に播く場合では40,000粒程度まで播種量を増やして播種します。
- ・1株当たり2粒播きとして欠株防止に努め、苗立ち本数の確保を図ります。

### ○中耕・培土と除草対策

- ・中耕は、初生葉展開から本葉1葉期頃に、子葉が隠れない程度に実施します。1回目の中耕・培土は、2～3葉期頃を目安に、適期に実施します。
- ・除草剤は、土壤条件や優占雑草（イネ科、広葉）を確認して使用薬剤を選択します。

## 〈 野 菜 〉

今月は梅雨に入りますので、梅雨入り前には場周囲の明きよの補修など排水対策をしっかりと行います。

今月はソラマメ、初夏どりキャベツの収穫期を迎えます。いずれも収穫適期が短いので、とり遅れないように作業を進めてください。

### ○アスパラガス（長期どり）

- ・収穫量の減少や奇形の萌芽等が見られたら、収穫を打ち切り立茎し株養成に努めます。立茎は、出荷サイズでLクラスの太さの茎を、畝の長さ1 m当たり10～15本程度を基準に選定し、握りこぶしが入る程度に適度に間隔をあけてバランス良く茎立てします。
- ・立茎本数を決めた後に萌芽してくる茎は、畑の見回りを良く行い、立茎本数が過剰にならないように間引き収穫します。
- ・立茎が進み、ある程度の長さになったら早めに誘引を行い、生育に応じて誘引の段数を増やして倒伏を防止します。また夏秋どりの若茎の色上りを良くするため、地面から70cm以内に発生する側枝は随時除去します。
- ・茎枯病や斑点病の早期発生、ジュウシホシクビナガハムシに対しては十分警戒し、早めの防除を心がけてください。

### ○ネギ

- ・例年、べと病の発生が多いほ場が見られます。この病原菌は被害植物中で越冬し、翌年の伝染源になることから、前年発生が多かったほ場では特に注意します。発生適温は平均気温15～20℃で、降雨が多い多湿条件で発病が助長されます。平年では5月下旬頃から感染適温になりますので、予防的防除に努めまん延を防ぎます。
- ・近年、定植直後の幼株に小菌核腐敗病の発病がみられます。葉先枯れ症状から始まり、発病が進行すると枯死し欠株となります。抵抗力の弱い生育初期の防除対策として、トップジンM水和剤20倍液に3分、または200倍液に30分、苗の根部を浸漬した後定植します。チェーンポット育苗の場合は定植直前にトップジンM水和剤250倍液をチェーンポット1冊あたり1 Lの苗床かん注を行います。
- ・夏季高温時の軟腐病予防対策として、土寄せ時にオリゼメート粒剤を株元に施用します。使用時期は収穫30日前までのため、8月どり夏ネギでは今月上旬、下旬の2回を目途に散布します。オリゼメート粒剤を砂質土壌で使用する場合は、薬害を生じる場合があるので施用量を3 kg/10 aとします。
- ・タマネギバエ、ネギアザミウマの発生が多くなる時期です。ほ場を良く観察して適期防除に努めて下さい。

### ○エダマメ

- ・県オリジナル品種の「あきた香り五葉」や「あきたさやか」など、9月どり中晩生種の播種期を迎えます。「あきた香り五葉」は6月1日播種で9月6日収穫、6月10日播種で9月11日、6月20日播種で9月16日収穫を目安とします。収穫適期幅は5日前後なので、選別調製労力を考慮し1回に播種する面積を決めます。
- ・「あきたさやか」では、6月1日播種で8月31日収穫、6月5日播種で9月2日、6月10日播種

で9月5日収穫を目安とし、播種晩期は6月25日頃とします。収穫期が重ならないよう作業するには10日以上播種間隔をあけるようにします。

- ・「あきた香り五葉」は「錦秋」など他の中晩生種に比べると、分枝数が少なく草丈が短いので、収量を確保するため条間80cm、株間20cmの密植とします。「あきたさやか」では条間80cm、株間25cmとします。チッソ成分はほ場条件に合わせて調整しますが、転作初年目ほ場では化成チッソなし、連作地でも10a当り3kgを上限とします。

## ○トマト（夏秋どり）

- ・今月下旬から収穫期を迎えます。果実肥大が進み、着果負担が増加する時期となりますので、草勢や天候に合わせて追肥、かん水を行います。一般に3段花房開花期が追肥開始時期となります。追肥量はチッソ成分で0.2～0.3kg/aですが、液肥を用いる場合は肥効を考慮して1回につき0.1kg/a程度の施用とします。
- ・梅雨期にかけては灰色かび病の発生しやすい時期が続きます。果実に発生すると、腐敗や落果を招くので、こまめな換気や、循環扇などを利用して通風を図り、湿気がこもらないように管理します。
- ・葉かび病耐病性品種の導入も進んでいますが、耐病性のない従来品種は、葉かび病の発生初期を見逃さず適期防除を行います。
- ・交配用として活用するセイヨウオオマルハナバチは特定外来生物に指定されており、農業生産で利用する場合は許可申請が必要です。在来種のクロマルハナバチは外来生物法は適用されませんが、どちらも導入する場合は必ずハウスの全ての開口部に防虫ネット（目合4ミリ以下）を張り、ハウス外への逃亡を確実に防止するようにしてください。

## ○キュウリ（夏秋どり）

- ・露地キュウリの定植は地温15℃以上を確保した温暖な日に行います。主枝から出る側枝は活着を確認してから5～6節までを摘除し、果実は10節前後までの摘除を基本とします。
- ・6～10節の側枝は1節摘心、10節以降は2～3節摘心を基本としますが、樹勢維持のため常に伸びている側枝を2～3本確保するようにします。
- ・低温が続く場合は、黒星病の発生が心配されます。発病最適温度は17～21℃付近にあるため、冷涼多湿な環境が続くと多発します。ひとたび発生すると、まん延を防止することが難しいため、早期の発生が予想される前年秋の発生ほ場では定植後に発生前から定期的に防除を行います。特に、例年発生が多い県北部では注意が必要です。

## ○キュウリ（ハウス半促成）

- ・ハウスキュウリは収穫盛期を迎え、着果による株の負担が増えるとともに、高温期に入り水分の蒸散量も急速に増えてきます。過剰なかん水や施肥は控え、着果量や収穫量に応じた定期的なかん水・追肥により樹勢を維持します。加えて、樹勢に合わせた摘果、摘葉、整枝を行い、収量や品質を確保します。
- ・梅雨期に向かい灰色かび病や菌核病が増えてきます。耕種的な対策として「過繁茂を避ける」「換気を図る」「樹勢を保つ」ことを心がけます。光合成の効率を高めるためには、午前中は十分な温度、湿度を確保しますが、午後からは換気を重点的にを行い、高温による消耗を抑えます。

## ○ホウレンソウ

- ・夏どりホウレンソウは高単価が期待できる反面、萎ちょう病等の土壌病害の発生により生産が不安定になりがちです。そのため、①土壌病害の予防対策として、作付前にECを測定し、適切な施肥を行う、②降雨時に停滞水がないよう排水を良好にすると同時に保水性のよいほ場を作る、③収穫時には根を抜き取り、残さをほ場に残さないようにする、などの管理に気を配ります。
- ・萎ちょう病による収量減が明らかとなり、30坪当たり8～10箱（35～45kg）以下に収量が低下した場合は、土壌消毒を行い、フザリウム菌密度を減少させて収量回復を図ります。県内ではクロルピクリンによるくん蒸、土壌還元消毒、蒸気消毒の3つの消毒法が行われています。クロルピクリン液剤による消毒は地温10℃以上の時期に行い、地温が15℃以上の時は10日程度の消毒期間をとります。土壌還元消毒は米ぬかを60坪当たり200kg散布し、耕起した後十分にかん水し（肩の所で切ったペットボトルをハウス内に適宜配置し、20cm程度水がたまる時間行う）、3週間程度密閉状態にします。30℃以上の地温が必要であるため6～8月が適期です。

## ○ソラマメ

- ・莢の肥大期にはほ場が乾燥すると肥大不良となるので、乾燥が続いた場合には通路にかん水等を行います。
- ・外観による収穫適期の判定は、莢の角度が水平から下向きとなり、莢の色が濃緑色で光沢が見られ、莢の包合線の色がやや褐色をおびて中央に細い線が見えだした頃が目安となります。
- ・今月中旬から収穫期となりますが、収穫期の多雨や高温で外観が茶褐色となる「サビ莢」が増えやすく、品質が低下します。収穫適期を迎えたら遅れずに収穫することが重要です。

## ○キャベツ（初夏どり）

- ・コナガは、発生初期の若齢幼虫期からの防除が重要です。平年の幼虫発生は6月1半旬から始まるので、発生状況を注意深く観察します。
- ・コナガは薬剤抵抗性がでやすいので、同一薬剤、同一系統剤の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーションして使用します。また、薬剤散布は収穫前日数など使用時期に注意して行います。
- ・4月中～下旬定植の作型では、今月中旬から収穫期を迎えます。収穫は1球重が1.2kg前後を目安とし、硬くならないうちに行います。収穫期に降雨が多いと裂球する場合があるので、収穫作業は品種特性や天候に合わせて遅れないようにします。

## 〈 果 樹 〉

### ○果樹の初期生育の状況

りんご、なしなど果樹の満開期は、春先が気温の高い日が多かったことから、早い状況となっています（表1）。

表1 果樹の初期生育 (5月7日時点)

樹種（品種）	調査地点	調査年	発芽期	展葉期	開花始	満開期	落花期
りんご（ふじ）	鹿角市	27年	4.6	4.17	5.2	5.4	-
		平年	4.13	4.26	5.14	5.18	5.23
	横手市	27年	3.30	4.11	4.29	5.2	-

		平 年	4. 11	4. 19	5. 9	5. 13	5. 19
な し(幸水)	潟上市	27 年	4. 1	4. 22	4. 26	4. 29	-
		平 年	4. 11	4. 30	5. 4	5. 9	5. 17
おうとう (佐藤錦)	横手市	27 年	3. 29	4. 25	4. 23	4. 28	-
		平 年	4. 8	4. 30	4. 30	5. 4	5. 17
も も (川中島白桃)	鹿角市	27 年	4. 4	4. 29	4. 28	5. 1	5. 7
		平 年	4. 12	5. 7	5. 6	5. 12	5. 19

※果樹試験場の調査値（鹿角市は鹿角農業振興普及課調査値）

※平年値は直近10年間の平均値

## 〇りんご

- ・粗摘果は1果そう1果を原則とし、早めに園地を一巡します。粗摘果が終わったら仕上げ摘果、見直し摘果の順に作業を行います。
- ・仕上げ摘果は、落花後25日頃まで（6月中旬）に終わることを目標とし、結実の良い樹から行うなど優先順位を決めて計画的に作業を進めます。着果量の基準は、ふじで4～5頂芽に1果（葉数60～75枚に1果）を目安としますが、樹勢や日当たりに応じて加減します（樹勢が弱い樹、日当たりの悪い枝などは着果量を少なくします）。
- ・残す果実は、①着果位置が良く、②果梗が太くしっかりしており、③大きくて形が良く、④障害の無いものとします。
- ・仕上げ摘果終了後の見直し摘果は、樹上で選果を行う意識で、障害果等を摘み取り良果がそろるようにします。
- ・開花中の天候不良等により結実が不足している園地や樹では、果実を良く観察して、できるだけ良い果実を残します。
- ・主枝や垂主枝の背面から発生した徒長枝など不用な新梢は、ナミハダニ等の耕種的防除を兼ねてせん去し、焼却処分します。
- ・樹勢が強く大玉傾向で例年ビターピットが出やすい園地は、カルシウム剤を散布し予防に努めます。なお、盛夏期など散布時に高温が予想される場合は、葉害が発生するおそれがあるので使用は控えます。

## 〇なし

- ・りんご同様、1果そう1果を原則とした粗摘果を早めに行い、その後、仕上げ摘果、見直し摘果を行います。
- ・新梢管理については、主枝や垂主枝の背面から発生した徒長枝など不要な新梢をせん去し、日当たりを良くするとともに、薬剤もかかりやすくします。
- ・予備枝から発生した新梢は、6月上旬までに、先端の新梢を1～2本を除いて、4～5葉残して摘心します。

## 〇ぶどう

- ・新梢の整理は開花期まで数回続けます。中粒種はやや強めの新梢で、大粒種はやや弱めの新梢でそろえます。開花前は目標本数の10～20%程度多めに残し、落花後、結実を確認してから最終的に調整します。かき取った新梢等は、灰色かび病等を防ぐため、園外に持ち出し焼却処分します。

## 【 花振るい防止策 】

### ①開花前の房作り（通常の種あり房を作る場合）

- ・キャンベル・アーリーやスチューベンなど中粒種は、開花始めまでに肩房を取ります。さらに、花穂が大きい場合、尻部を1～2cm切り詰めると結実が良くなります。
- ・巨峰は、開花始頃までに花穂の先端部を使い、7cm程度（14～15段）に切り詰めます。なお、安芸クイーン等赤色種の場合は、8cm程度（15～16段）にします。

### ②キャンベル・アーリーやノースレッドは、満開5～7日前に、樹勢の強い新梢を対象に、第2果房から5～6葉残して先端を摘み取ります。

### ③フラスター液剤（新梢伸長を抑制し着粒増加を図る）の散布は、巨峰は新梢展開葉が7～8枚時に、500倍液 100～150 リットル/10a を、新梢全体に散布します。

## ○共通

- ・農薬散布時は、ラベルなどで使用方法を確認してから実施します。また、おうとうなど収穫期に入るものに対する農薬飛散には十分に注意します。
- ・草刈りは、草高25～30cmくらいで行い、樹と草生の養分競合を避けるようにします。
- ・樹勢の弱い樹は、有機物等のマルチで土壤の乾燥防止に努めます。
- ・晴天が3日以上続いたら、特に、砂土や若木、定植・移植した樹などは適宜かん水を行い、生育の停滞を避けます。

## 〈 花 き 〉

今月は梅雨入りとなります。近年は豪雨による被害が相次いでいますので、対策を万全に講じます。また、降雨後は病害が発生しやすくなりますので、必ず薬剤散布による防除を行います。日頃の観察も怠らず、適期作業で高品質生産を心がけます。

逆に近年、この頃に夏のような天候になることもあり、降雨がない日が続く場合は露地ほ場にかん水をするなど、臨機応変に対応します。

## ○露地ギク

- ・摘心した株から3～6本わき芽が伸びていますので、そのわき芽が3本となるように整枝します。勢いが強い枝や弱い枝を付け根からかき取り、平均的な枝を残すのがポイントです。
- ・定植が遅れたところや側枝の伸びが悪いほ場では、液肥やかん水を積極的にを行いボリュームアップと初期生育の確保に努めます。
- ・今月は特に白さび病の発生に注意します。地際の子葉を早めにかき取って通風を良くし、1週間に1回薬剤散布を行います。散布は予防剤を主体に、発生を確認したら治療剤に切り替え、被害の拡大を防ぎます。
- ・ハモグリバエ、アブラムシ、ミドリカスミカメムシ、キクスイカミキリムシ等も発生する時期ですので、薬剤散布の際は殺虫剤も混用します。
- ・薬剤散布は、できるだけ午前の涼しい時間帯に行い、周囲の農作物への飛散防止に十分注意します。

## ○トルコギキョウ

### － 8月出荷作型－

- ・草丈が15～20cmになるとチップバーンや茎折れの発生が多くなります。これらの障害は、多肥栽培や軟弱な株ほど発生しやすいため、換気を図り、かん水過多にならないよう土壌水分管理に注意します。
- ・チップバーンの発生が多い品種や、樹勢が強くなりすぎた場合は、定植後1ヶ月頃から出蕾期にかけて石灰資材を10日間隔に3～4回散布し予防します。
- ・出蕾後の主枝中心花の摘蕾は、つぼみが小豆大になったら実施します。  
摘蕾が遅れるとつぼみに栄養が取られて花蕾のバランスが悪くなるため、摘蕾はつぼみの大きさが3cm以内の時期までに実施します。

## ○リンドウ

- ・6月は茎の曲がりが発生しやすい時期なので、ネット上げはしっかりと行います。一番下のネットは草丈の半分の位置、最上段のネットは草丈の8割までの位置とし、2段目のネットが最上段と最下段のネットの中間の位置になるように調整します。
- ・ネット上げの際にネットから茎がはみ出る場合があるので、ネット上げが終わったら、はみ出た茎をネットの中に入れ込みます。この時、茎を折らないように注意します。
- ・病害では、葉枯病に加え6月下旬から褐斑病が発生します。褐斑病は、前年発生したほ場では今年確実に発生することから、6月下旬～7月下旬までの時期にストロビーフロアブルや、葉枯病と同時防除できるダコニール1000を用いて防除します。

## ○シンテッポウユリ

- ・梅雨期は、葉枯病の発生が多くなる時期です。薬剤散布は、新葉の展開速度に合わせ7～10日に1回としますが、降雨によって葉枯病の発生が助長されますので、降雨後は必ず散布します。散布は株全体に薬剤が十分かかるように行います。
- ・フラワーネットは、引き上げ時期が遅れると曲がりの発生につながるのでこまめに引き上げます。

## ○ダリア

- ・生育が旺盛になる時期です。フラワーネットを引き上げて、曲がりのないようにします。
- ・下段のネットは地面から20～30cmの位置まで上げたら固定し、上段のネットは生育に応じて適宜引き上げます。
- ・うどんこ病、ダニ、スリップス、アブラムシなどの病害虫が多くなる時期でもあります。
- ・適期に薬剤散布をします。できるだけ午前の涼しい時間帯に行い、周囲の農作物への飛散防止に十分注意します。

## ○ケイトウ

- ・施設栽培は生育初期に土壌の乾きに応じ3～5日間隔、露地栽培であっても乾燥が続いた時にはかん水を行います。
- ・初期生育のかん水管理が、草丈確保や生育のそろいに重要です。かん水ムラのないようにします。
- ・着蕾始めまではハウス内の温度、湿度ともに高めに保ち、草丈をできるだけ伸ばすようにします。花芽分化期までは晴天時や高温時のみに換気し、夕方には閉めるようにします。



## 〈 畜 産 〉

### ○飼料作物

- ・ 平年の梅雨入りは6月14日頃となっています。牧草の収穫作業を梅雨入り前に終えるよう、ラッピングサイレージ調製を組み入れるなどして効率的な作業に努めます。また、収穫の10日後位に2番草の収量確保を図るため追肥を行います。
- ・ 草地内のギシギシやヨモギ等の群生しやすい雑草は、あまり広がらないうちに除草剤のスポット処理で防除します。牧草収穫後に雑草が展葉してから、アージラン液剤またはラウンドアップマックスロードを局所散布します。防除後は、裸地とならないように牧草種子を追播します。
- ・ 飼料用とうもろこしの雑草防除で生育期に薬剤防除する場合は、各薬剤の適応時期を逸しないようにします。外来雑草のイチビは、随時発芽してくるので、生え揃った時期を見きわめて、バサグラン液剤またはシャドー水和剤で防除します。

強害外来雑草を繁茂させないためには、堆肥からの雑草種子の侵入を防ぐことが大切です。堆肥の切り返しを十分行い、発酵温度を60℃以上にして雑草種子を死滅させます。

### ○畜舎周辺の管理

- ・ 梅雨入り前に畜舎周辺の排水対策や、ハエ等の発生源となるところがないか点検します。排水溝の清掃や水たまりができるような窪みは補修し、停滞水ができないようにします。また、ふん尿の搬出経路にウジの発生源をつくらないようにし、堆肥舎や尿溜に雨水が入らないよう点検、補修します。

(お問い合わせ先)

秋田県農林水産部園芸振興課

TEL : 018-860-1801 FAX : 018-860-3822

E-mail : engei@pref.akita.lg.jp